

編集委員からの 2 つの「論点」

「リテラシーズ」編集委員会*

Ohri (2005) では、母語話者と非母語話者の対話によって「共生」をめざす地域日本語教育の中にも、母語話者のステレオタイプが優勢化し、さらにそれが強化されていくという状況が、エスノグラフィックに描き出されていて、ナイーブな「共生」論を批判的な観点から考察する問題提起的な論文であると評価します。

ただ、Ohri (2005) に対して編集委員会として明確にしたい点があります。以下の点についてお答えいただき、今後の議論につなげたいと考えます。

1 論点 1

第一は、「母語話者 vs. 非母語話者」という図式があまりにも強固である点、つまり、一人の中年女性の言語行動を「母語話者」と拡大してステレオタイプの「母語話者」像を作り出している点がさらに別のステレオタイプを生む問題となるのではないのでしょうか。母語話者・非母語話者を問わずステレオタイプ構築は絶えず行われているという事実をはっきり押さえた上での分析が必要だと思われませんが、この点についていかがお考えでしょうか。

2 論点 2

第二は、本論文では、ステレオタイプ構築の内実がきわめて具体的に分析され、それによってナイーブな「共生」論を批判するものになっていることが読み取れます。しかし、むしろ問題なのは、なぜこのようなステレオタイプ構築がなされる状況になっているかということではないのでしょうか。

「共生を目指す相互学習型活動」と銘打つからには、そこに「教育」としての設計があるはずです。

ところが実際にはこうしたステレオタイプ構築が行われているという現実があります。では、その教育環境や教育目的の設計はどうなっているのでしょうか。このような点こそ、日本語教育としての問題点であり、本来批判されるべき点ではないのでしょうか。こうした活動型の学習／教育の問題点については、「目的論の不在」(川上, 2000) や「理念なき活動の目的化」(細川, 2001) として、すでに指摘されていることでもあります。

以上の 2 点についてご意見をいただき、これを本誌に掲載することで今後の議論につなげたいと思います。どうぞよろしくお願いいたします。

文献

- Ohri Richa (2005) 母語話者による非母語話者のステレオタイプ構築—批判的談話分析の観点から『WEB 版リテラシーズ』2(1). くろしお出版.
URL: <http://www.kurosio.mine.nu/21web/>
- 川上郁雄 (2000) 転換期の日本語教育『宮城教育大学紀要』35.
- 細川英雄 (2001) 問題発見解決学習と日本語教育『早稲田大学日本語研究教育センター紀要』16. (早稲田大学日本語研究教育センター (編) (2003) 『「総合」の考え方と方法』所収)

* 佐々木倫子・小川貴士・門倉正美・川上郁雄・砂川裕一・
牲川波都季・細川英雄